

開会の辞

日本語教育センター主催 シンポジウム 2017

短期日本語プログラムは大学の 国際化にどのように生かせるか —日本文化社会講義を通した学部との連携—



副総長、観光学部教授
豊田 由貴夫

○**数野** 皆様、本日はお忙しい中、立教大学日本語教育センターシンポジウム 2017にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

本日の司会進行役を務めさせていただきます、日本語教育センター員、数野恵理と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、開会の辞を頂戴いたします。立教大学キャンパス連携担当、社会連携担当副総長、観光学部教授、豊田由貴夫先生、お願いいたします。

○**豊田** 皆さん、きょうはお集まりいただきまして、ありがとうございます。この短期日本語プログラムというのは、立教大学でも数年前からですが、もう3年目になりますか。あっ、まだ2年目ですか。失礼しました。もう長い間やっているような気がしましたが、まだ2年目なのですね。これは3週間ほど立教大学の新座キャンパスに海外からの学生さんを受け入れまして、集中的に日本語を学んでいただくというプログラムです。このプログラムの中の目玉になると言っていていいかと思うのですが、それが今日紹介する「日本文化社会講義」になります。これは、もちろん日本の社会、文化を紹介するという意味もあるのですが、同時に、その講義に関連する現場に出かけて行って、実際に日本の社会、文化を体験してもらうという意味があります。

それからもう一つは、講師である先生方の専門性を生かして授業をやっていたということの意味があるかと思っております。それで受講生の人たちからも、非常に評判がいいと聞いております。

これは新座キャンパスで行われるものですので、講師は新座の先生方をお願いすることが多いのですが、私が新座キャンパス担当の副総長ということも



日本語教育センター員

数野 恵理

そうですね、今後もないほうがいいのかもしれないとは思っていますけれども。

ということで、私自身は、この短期日本語プログラムは、単に海外からの学生さんを受け入れるだけではなくて、これがその後の立教大学での長期の留学につながったり、あるいは海外での立教大学のプレゼンスを高めたりするという意味があるのではないかと考えております。その意味ではこの講義に非常に期待しております。今日はこの日本文化社会講義が、日本語教育の中でどのように意味づけられるのか、あるいは国際交流の中でどういう意味があるのかということが、いろいろ議論されるかと思っております。私もお話を伺うのを非常に楽しみにしております。そして後半のほうではフロアの方を含めてディスカッションの時間があるようですので、ぜひフロアの皆様も、質問、コメント、ご意見などをいただけたらと思っております。

それでは、しばらくお付き合いのほど、よろしく願いいたします。今日はご参加ありがとうございます。(拍手)

○数野 豊田先生、ありがとうございました。

ありまして、今まで、先生方に講義をお願いするのを手伝ってきたという経緯があります。今日はこれからお話があると思うのですが、先生方にいろいろ工夫していただいて、受講生に非常に評判がいい授業になっています。そうすると、各先生方に非常に手間をかけていただくこともありまして、毎回同じ先生方をお願いするということもできないものですから、いろいろな先生方にお声がけしているという状況になります。

講師の先生が見つからないときは、私がやりますと言っているのですが、これまで、まだ幸か不幸か私は出番がありませんで